
桜舞う此処で

紗刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜舞う此処で

【Nコード】

N6820Y

【作者名】

紗刃

【あらすじ】

九条相神は進学の都合上、田舎へと兄妹と共に引っ越してきた。

幼馴染の通う私立幕夜坂高校には個性的で曲者揃いの生徒たち。中学時代からのライバルも他校に現れ、巻き起こす青春アクションストーリー……！

巻

周りを見渡す限り、一面緑の絨毯のような田んぼが広がっている。家はポツンポツンと数えるほどしかない集落、2階から見える川では子供たちが石を投げて遊んでいる。

太陽が暖かく辺りを照らしていて、山に囲まれたこの田舎の風景の中、相神は大きく深呼吸をして喜々に満ちた表情を見せた。九条相神がみはこの何もない田舎の地に、兄妹と共に引越してきたのだ。2階に自身の部屋を取った彼女は大きな窓から辺りの景色を眺めていると、階段を上ってくる軽やかな足音が聞こえた。そしてその者は扉をノックすることなく開けて顔だけを覗かせた。

「ちよつとー。まだ全然片付いてないじゃん」

「そういうお前はどなのよ」

「お姉ちゃんよりは片付いてるって…」

短髪で幼い顔立ちの少女は相神の妹で、九条迅帝はやてといい相神の3歳下で中学校2年生。その割には身長も低く幼な顔の為小学生に間違われやすく、それがコンプレックスでもある。

少女は頭を掻いて彼女の部屋の状況を見て大袈裟に大きな溜息をついてみせた。相神の部屋は畳の上にカーペットを敷いて勉強机とベッド、そして本棚だけが置いてある。

あとは部屋の隅に段ボールの山が積み重なっており、引越してきたから3時間経つというのに全然片付いていなかった。

「あーあ…今日中に終わるのかな」

「終わるっつの。ってか、何か用でもあったの？」

相神は少し機嫌を悪くしたように語尾を強めた。それに迅帝は思い

出したように少しだけ目を見開いた。

「腹黒狸が来たっていいに来たの」

「…腹黒狸って」

少々表情を引きつつ苦笑する相神に、迅帝はニコニコと笑っているだけだ。迅帝が腹黒狸と呼ぶ人物は、一年前にこの地に下宿している相神の幼馴染である。そして彼は今日から下宿をやめ、この家で共に暮らすことになっていた。

「ったく…。時間、無駄にしちゃったじゃん」

「あたしは悪くないもーん」

迅帝はべーつと下を出して早々に2階から退散してしまった。それを見て相神は笑った後、その後を追うように1階へと降りて行った。

3

玄関では相神と迅帝の兄である工刀くりとと、通称腹黒狸の永原新八ながはらしんぱちが話していた。

「にしても、全然変わらないな新八は」

「そうっすか？ 工刀さんも相変わらず格好いいっすけどね」

「ははは。褒めても何もでないぞ」

「それは残念」

他愛もない会話を繰り広げる二人の所に、迅帝が戻ってきた。工刀は迅帝の方を振り返って「相神は？」と訊ねれば「すぐ来るよ」と返ってきた。新八はそれを見て苦笑した。

「迅帝も相変わらず工刀さんに使われるよなー」
「うっさいよ、八っちゃん」

ぷくーとフグのように頬を膨らませる迅帝を見て新八は笑った。すると階段を駆け下りてくる音が聞こえると、廊下の角から相神が姿を現した。新八はそれを見ると、屈託のない笑みを浮かべて見せた。

「よっ。久しぶりだな」

「一年振り、新八。元気そうだね」

「まあな」

「身長は止まつちやったまいたいけど」

「身長の話は余計だ」

相神の頭に新八はチョップを入れる。新八は男子の割には小柄で身長が低い。そして相神との差はおよそ10cm程度である。勿論、相神も女子としては小さい方だが。少しヒリヒリと痛む頭を擦る相神は、怒る様子も見られない。

「新八は部屋上下どっちにしたの？」

「ん？ 下。荷物運ぶのに苦労しないようにって」

「面倒くさがるの新八なら、遣りかねないと思っていただけだね」

お互い顔を見合わせて笑う二人に工刀は気づかうように言った。

「新八、お前の荷物部屋に運んどくぞ」

「え、や、悪いっすよ。俺がやります」

「気にすんな。久しぶりの再会だし、話したいことも沢山あるだろ。つてことで、やるぞ迅帝」

「なんであたしまでー!?!」

迅帝を掴んで引つ張っていく工刀は楽しそうに笑っていた。迅帝はというと、少し不満そうな表情をしながらも大人しくそれに従った。二人は少し間を置いた後もう一度互いに顔を見合わせた。

「どつする？」

「ここら周って見てみるか。どーせ、近所挨拶とかまだ行ってないだろ」

「まーね」

そついうと二人は外に出て、集落を回って見てみることにした。

貳

「うっわー。超田舍って感じだわー」

相神の漏らした一言に新八は声を立てて笑った。

「そりゃそうだろ。高校まで車で30分はかかるんだぞ。近くにコンビニもなんもないしな」

新八の言う事は全て事実である。小・中学校まで家からは10km程度。そして高校までは車で30分。近くにコンビニもなければスーパーもない。何もない村である。唯一の暇つぶしと言えば、古いブランコがある公園と神社くらいなものである。携帯はなんとか圏外から免れている状況であり、使うには問題は特にないだらう。それほどまでに、相神の引越してきたのは山奥だという事である。

「なのに高校は私立ってどういうことやねん」

関西弁でツツコミを入れる相神に新八ケラケラと笑う。

「さあなー。話によれば、創設者が凄くこの地を気に入って、高校立てたんだとよー」

新八は足元の石を拾って川に向かって投げた。高く飛んで行った石は音を立てて川に落ちれば、新八は満足そうに笑う。そんな新八を見て、相神はつられたように笑った。

「楽しそうだね」

「ん？ まあな。これからまた一緒に学校生活送れるし」

「…そ。ま、でも新八に勧められなかったら、こんなド田舎に来なかつただろっね」

相神は嫌味のような一言をいって遠くの景色を眺めていた。新八はそれを嫌味とはとらず、何やら楽しそうな表情をして相神の隣に立った。

「都会の空気より、澄んでて良いだろ」

「うん。…なんか、気が楽になった気がする」

大きく深呼吸をして見せる相神を、安堵したような瞳で新八は見ていた。ぐいーっと空に向けて背伸びをした新八を見て、相神は声を立てて笑った。

「さてつと…大分見て回つたし、そろそろ帰ろーか」

「んじゃ家まで競争ー」

そう言つて突然走り出した新八に、一瞬呆気にとられた相神だがすぐにその後を追いかける。

「ちよ、今のはずるいでしょー!」

「だつてお前足速いしー」

「遅いしつ…ほんとに小賢しい狸だな」

「うわっ。今の一言ムカつくわ」

近所迷惑を考えている筈もない二人は、叫びながら滅多に車の通らない道路のど真ん中を走る。二人とも本気で走る気なのか手加減をしていないが、その表情はどこか楽しそうで笑っている。幼い子供がするようなことだが、二人とも気にしてはいない。

新八に追いついた相神は、背中を思いきり叩けば少しバランスを崩して前に倒れる新八。そんな新八を見て相神は腹を抱えて大きな声で笑う。

「てんめっ…！」

新八は何とか体制を整えれば、少し先行く相神を見てニヤリと不敵な笑みを浮かべた。それを見た相神は、少し表情を強張らせて止まっていた歩みをゆっくりと進め始めた。そして新八が相神の元へ駆け出せば、相神も同時に駆け出した。

「覚悟しろよ…！」

「ちよ、待つて待った……ぎゃああ…！」

すぐに追いついた新八は相神の頭を思いっきり叩けば、相神は悲鳴を上げてその場に蹲る。新八は腹を抱えてげらげら笑って相神の目の前にしゃがみこんだ。

「女らしい悲鳴上げろよー」

「余計なお世話だよ…」

そう呟いて相神は大袈裟に溜息をつけば、二人は互いに顔を見合わせ声を上げて笑った。はたから見れば、道路の真ん中で笑っている姿は変人だろう。だが此処は田舎だし、人通りも少ない為誰もこの光景を見てはいない。二人は笑うだけ笑った後、力が抜けたかのようにならぬようにその場に座った。

「ひっさびさに騒いだなー」

「だねー。なんか安心したわ」

「ははっ。息苦しいのが抜けて何よりだわ」

新八の言葉にケラケラと相神は笑った。そして勢いよく立ちあがって家へと帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6820y/>

桜舞う此处で

2011年11月20日19時14分発行